

河内の街道シリーズを終えて

杉山三記雄

シリーズ河内の街道を歩く①～⑤ 終えた今、思い起こす。2013年秋にシリーズ①東高野街道を出版して2020年にそのシリーズの5冊目の最終として⑤古堤街道を迎えた。読書館の鮫島正安氏からお話がありシリーズがスタートした。ここに①～⑤の表紙を左記に掲げてみようと思う。

彼は奈良県生駒市に居住し印刷や本の出版業を営んでいたが、地方文化や歴史に関心をもち、以前からその研究と普及に熱心だった。中央志向でなく郷土の歴史、文化の大事さと面白さに気付いた頃で、以前に私のホームページに河内の街道を少し取り上げていた。彼から本の話があったときは、東大阪市に關連する街道をすべて手掛けるのは、両肩にかかる重さに不安もあり、完成までかかる年月は最低5年要ると思った（実際は7年の歳月が流れ、残念ながら鮫島氏は、2019年、春に病のため鬼籍に入るといふ予期しなかった悲しみが起こった）。鮫島氏と相談の上、第1回目は「東高野街道」にした。都の京か

ら高野山や熊野詣をする皇族や武将、庶民が通った街道。2回目は「俊徳街道・十三街道」だった。八尾の長者の息子、俊徳丸が四天王寺へ通ったという俊徳街道、途中で俊徳街道と合流して奈良に向かう十三街道。3回目は、大坂の陣400年記念にかかる時期だったので「大坂の陣と戦の道」とした。4回目は「暗越奈良街道」を取り上げ、ここを歩いた旅人達も記載した。

鮫島氏が黄泉の世に旅立つという悲しみが起こり、私ももともと強くない体のため途中で体調を崩したりしたが、故鮫島氏から常に温かい助けをもらいシリーズ⑤にたどり着くことができた。このことは感謝のしようがないくらいである。

①東高野街道 生駒山西麓編(街道に宝の山あり)

東高野街道は天下取りの歴史街道。一緒に歩きはじめた仲間のうんちくを耳にしながらか歩くのは楽しいものだ。街道を見聞きして疑問が生じると帰宅後に家で調べたりした。各街道の往年の輝きは、時代の流れで極めて少



なくなつたとはいえ、新しい鉄道が敷かれて街道の道筋をほぼ踏襲し、新しい時代を展開している。現在栄えている盛場も街道の交わりから引き継がれ、鉄道が敷かれたり、駅ができ、栄えているのは興味深い。現代に街道が生きていると言えよう。思いははじける。貝原益軒(左写真)は、元禄2年(1689)



東高野街道を歩き、当時の深野池や河内の村々を回って南遊紀行を著している。南遊紀行と現在の風景を比較すると興味深い。街道沿いには歴史・文化が残っていて掘り起こして広めたいものだ。最近では、毎日新聞がこの街道を京都、八幡市から各市を南下し取材して「わが町にも歴史あり・知られざる大阪」と題して連載している。

東高野街道が始まる八幡市から現在は東大阪市に入り、街道を中心に東の山手まで歩き取材して丹念に調べて記事にしている。特にコロナ禍の中、遠くに行くことを控えている現在、身近な場所で行けるのは魅力的だろう。go to travelよりは go to near town がいいだろう。

②俊徳・十三街道 (幽玄の中世の道をゆく)

俊徳街道は、俊徳道ともいわれてきた。古くより、俊徳丸が生まれた、八尾の高安の里から舞楽を習いに四天王寺に通った街道と伝わる。一方、十三街道は、玉造から東成区を通り、東大阪市菱屋西で俊徳街道と合流し、八尾を経由、十三峠を越えて平群・龍田に通

じている。
ここでは両街道を俊徳街道・十三街道と表
わしている。



陽が昇る高安山の麓に生まれた俊徳丸、陽
が沈む、西方浄土の海・難波津に近い四天王
寺に衰えたからだでさまよい歩く俊徳丸。蘇
生と西方浄土、「生と死」「動と静」の壮大
な光景と日想観が胸に浮かんでくる。ドラマ
チックな俊徳丸の生涯を想いうかべながら、
周辺の歴史的な個所や興味深いスポットなど
を、写真やスケッチをまじえ、浮かびあがら
せた。

朝日新聞 de 「みちものがたり」に俊徳道
がクローズアップされた。

朝日新聞の「de」は、全国でも人気コラム
であるのでそのコラムで俊徳道を取り上げ報
道された。東大阪市の中に全国から注目され
て価値のある街道があるのだと次の記事のよ
うに紹介された。人名が入った街道は全国で
も珍しいらしい。



③大坂の陣といくさの街道(真田幸村、木村重成は
いかに戦ったか)

2015年に大坂の陣400年記念事業が
大阪で展開された機会に、河内の街道シリ
ーズで「大坂の陣といくさの街道」を刊行した。
当時は大勢の軍勢が街道を往来し、戦は街道
上に展開したりまた街道近くに陣を置いたり
した。街道を辿れば戦跡や歴史的な業績が残
っている。
戦の場所に行って聴き取りをすれば、旧村
では語り継がれていることがある。その一つ
を紹介することにしよう。

郷土に伝わる大坂夏の陣

若江の戦い後に若江の里には討死した将士
の亡霊が出たという話。

「討死者の亡霊」若江の戦場跡を火もゆること”
「宿直草(とのいくさ)」

このとき、取材で戦跡など自分で回り、聴
き取りをしたが、まだまだ聴き取りは十分
できなかつたり、消えてしまっている逸話も
おおくあるようだ。聞き逃したりしたところ
は多いのが残念なことだ。江戸中期の道標が
移動されたり、区画整理などのため街道が民
家が変わったりして街道が一部変更されてい
る。当時の説話継承が困難なように、街道の
元の位置をたどるのもむづかしくなっている
と言えよう。

江戸初期に発行された「宿直草」に収録さ
れていた記事によると、若江の里では夜にな
ると夏の陣若江の戦いで討死した亡霊が火の
玉になって出没すると書かれている。当時の



真ん中南北にある薄緑ラインが想定若江堤

決戦場は“若江堤”であった
 木村重成について子どものときよりよく聞かされ育った。村の先輩の方に、小さい頃は



様子が挿絵に描かれている。豊臣方と徳川方を合わせるべく多く亡くなっているの、亡霊が出るのの話を多く残っている。

母親に連れられ木村重成の命日の6日には毎月墓参りしていたとお聞きしている。この戦では徳川方の井伊藩の侍も多く討ち死し、勝利した井伊藩の戦死者の墓参りするよりも若武者として華々しく散った木村重成を偲んで墓参りする風習が地元や大阪の人には多かった。またこの墓の周辺は昔から菊作りが盛んでこれも江戸時代から木村重成の墓前に供える花として人々に求められたことが始まりと伝わっている。私は、旧陸軍参謀本部作成の大坂役附表図に描かれている弓状の「若江堤」が、木村重成の戦の主戦場であったと考えている。木村重成と向かい合った徳川方の大名、井伊直孝の絵師が描いた絵巻を参考にした。戦のあったのは元和元年（1615）、玉串川は旧大和川の本流として川幅が200メートル近くあり、若江村を水害から守るため、弓状に堤防が設けられた。司馬遼太郎さんは

『若江堤の霧』という題で若江の戦いを短編小説にしている。
 戦は街道上に展開した。

④暗越奈良街道とその旅人たち（くらがり峠は、幾多の時代をながめ、様々な旅人を迎えては見送ってきた）

暗越奈良街道を歩いた人物を次のように11名を取り上げた。（行基、鑑真、豊臣秀長、役行者、与謝野蕪村、松尾芭蕉、慈雲尊者、晁鐘成、西鶴、ラザフォード・オールコック、蘇我理右衛門）



「月日は百代の（はくたいの）かかく）にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に……」と俳人の松尾芭蕉は「おくのほそみち」に記している。その旅人は各地の街道を旅した。

暗越奈良街道は古代から難波と大和をつなぐ、難波宮と平城京、最短距離の道として多くの旅人が行き来した。暗越奈良街道は、大阪と奈良を結ぶ最短距離の街道としてよく利用された。

⑤古堤街道(京橋から野崎詣り、龍間越え生駒宝山寺への巡礼道、屋形船、落語、カップ、船着場様々なこと浮かぶ古堤かな)



古堤街道は中央左右線

⑤では大きく変貌した古堤街道の旧街道の掘り起こし、龍間の老舗茶屋「大文字屋」の登場、山上の田原や生駒宝山寺への道、峠の地蔵の写真など、今まであまり取り上げてこられなかった箇所を取り上げようとJR京橋駅前から東に向けて古堤街道(こて)を出発した。名称は正式には古堤街道(ふるつつみ)と読むのが正しいだろうが、街道沿いの土地の人は昔から「こて街道」と親しく呼んでいた。この街道は、寝屋川改修により部分的には変貌し昔の風景は大きく消えているのは残念であるが、昔の風景を残しているところを追い求めてみた。

この街道は文字とおり古堤であり、何しろ古大和川の堤が残っている街道である。

京橋付近はJR線、JR東西線そして京阪電鉄私鉄、地下鉄の駅などここに集結するようになり、活発で雑多なところだ。野崎観音へお参りが盛んな昔も古堤街道、京街道などが交わり活発な場所。

古堤街道は生駒聖天へのお参り道でもあり、このルートや砂茶屋へのルート、そして古堤街道の北ルートといわれる田原方面を辿ることができたのは幸いであった。街道には数多くの茶店が途中にあった。その有名な一つとして「大文字屋」が龍間にあった。その高名は耳にしていたが、私にはその所在は長らく不明だったがそれを今回の取材中に発見でき訪れることができたのは幸いであった。

茶屋 大文字屋

早速にそこに訪れ大文字屋を目の前にした。当時は茅葺屋根だったが瓦屋根風に変わり料理屋になっていたが旧街道中腹に交差する道には挟まれるようにたたずんでいる。



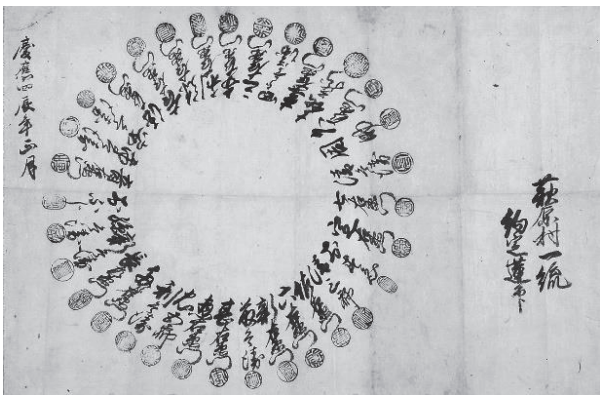
古堤街道の龍間にある茶屋大文字屋は、昔から「だいまんじや」と呼ばれ有名だった。旅籠としても知られていたので生駒昇天さんお参りの途中に多くの人が立ち寄っては休んだろう。(スケッチは筆者)

「家あれば正月もある谷の底」と刻まれている蟻兄の俳句にあるように龍間は山深い、谷が深いところであり、簡単にはいけないような所といえよう。

大文字屋の庭園に江戸時代の俳人、蟻兄の句碑が庭にあると聞いているので一度訪れてみたいと思っている。龍間に勿論、阪奈道路

もゴルフ場もない時の状況がうかがわれ、この俳句には趣がある。今は「日本料理大文字屋 龍田川」になっている。

古堤街道の砂茶屋ルートに印象深い騒動が起こっている。県道交差点と生駒川(竜田川)を東にわたり、生駒台丘陵に沿って行くと、現在は大きなもちのきがあるが、この辺りの旅籠屋に村の指導者が集まり謀議した。「矢野騒動」と呼ばれるもので幕末の動乱により領主側の出費がかさみ、領民に矢野代官が負担増を強いたため、小瀬村の与平ら惣代「そうだい」は従来の領主を拒否し、大坂の長州藩の陣屋へ願い出た(1868年)。
嘆願を受けた長州藩の一隊は、辻村の陣屋に到着し、包囲していた約500人の百姓達が見守るなか、矢野代官ら陣屋役人を大坂へ連行した。



(写真は新茶屋)

「矢野騒動」は、「御一新」のさなかに起きた、全国的にも注目すべき一揆で、当地の人々の「世直り」への期待の大きさをうかがうことができる。傘型連判状は首謀者が分かりにくくするもので奈良県内でも珍しい貴重な史料といえる。
陣屋跡石碑 生駒市辻町20 辻町第2公園内

幕末の志士、伴林光平は1863年天誅の乱に関係し大坂へ逃げる際に太刀を杖代わりにしてよろよろして新茶屋に到着し、一杯の粥を所望したとここに伝わる。

東大阪市の郷土史家・杉山さん
古堤街道ガイド本発刊

東大阪在住の郷土史家・杉山さんが、古堤街道の歴史をまとめた「古堤街道ガイド」を出版した。杉山さんは、古堤街道の歴史を研究し、ガイド本を出版した。このガイド本は、古堤街道の歴史や名所、そして周辺の文化を紹介している。杉山さんは、古堤街道の歴史を研究し、ガイド本を出版した。このガイド本は、古堤街道の歴史や名所、そして周辺の文化を紹介している。

シリーズ完結となる「古堤街道」を発刊した杉山さん

(まち・むら文化研究会)

古堤街道を出版して図らずも大阪日日新聞社が取り上げていただき報道してもらったのは光栄だった。心から感謝申し上げます。